方丈記・徒然草

稲田利徳◇山崎正和

潮　古　典　文　学　ア　ル　バ　ム

方丈記・徒然草

稲田利徳　山崎正和

工业学院图书馆
藏书章

新潮古典文学アルバム

編集・執筆　稲田利徳
エッセイ　山崎正和

資料提供協力

井上宗雄　長田貞雄　小杉一雄　杉本健吉　稗田一穂　松森　務
金剛峯寺　聖衆来迎寺　称名寺　常楽寺　神宮文庫　静嘉堂文庫　大通寺
出光美術館　岩波書店　梅沢記念館　神奈川県立金沢文庫　学習院大学学習研究社　京都国立博物館　宮内庁書陵部　国立公文書館内閣文庫
大東急記念文庫　大徳寺　大福光寺　長泉寺　筑波大学　東京国立博物館　東洋文庫　徳川美術館　名古屋市蓬左文庫　日本古典文学会　林原美術館
不二文庫　平凡社　法界寺　前田育徳会尊経閣文庫　水無瀬神宮　メトロポリタン美術館　山形県米沢市教育委員会　山種美術館　吉川英治記念館　陽明文庫　霊松寺

写真撮影

久米たかし　剣持加津夫　新潮社写真部

新潮古典文学アルバム　12
方丈記・徒然草
一九九〇年七月五日印刷
一九九〇年七月一〇日発行
発行者　佐藤亮一
発行所　株式会社　新潮社
東京都新宿区矢来町七一
郵便番号一六二
電話（業務部）03―三二六六―五一一一
（編集部）03―三二六六―五四一一
振替　東京四―八〇八
印刷　大日本印刷株式会社
製本　加藤製本株式会社
＊価格はカバーに表示してあります
乱丁・落丁本は、御面倒ですが、小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取り替えいたします。
無断転載を禁ず。

©SHINCHOSHA, 1990　Printed in Japan
ISBN4-10-620712-5　C0391

新潮古典文学アルバム

方丈記 徒然草

目次

いかが要なき楽しみを述べ……　山崎正和　2

『方丈記』の世界　稲田利徳　9

はじめに　10

『方丈記』の成立と内容　14

鴨長明の生涯――折り折りのたがひめ　22

『方丈記』の魅力　34

『方丈記』の諸本とその性格　56

『方丈記』の影響と享受　58

『徒然草』の世界　稲田利徳　61

『徒然草』の成立と内容　62

兼好の生涯――おきどころなき身　74

『徒然草』の魅力　82

『徒然草』の諸本とその性格　96

『徒然草』の影響と享受　98

おわりに　102

鴨長明・兼好法師年表　稲田利徳　104

関連作品　109

方丈記・徒然草を読むための本　111

カバー絵＝住吉具慶画「徒然草画帖」第七十四段（東京国立博物館蔵）

編集＝木挽社

方丈記
徒然草

稲田利徳
山崎正和

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook

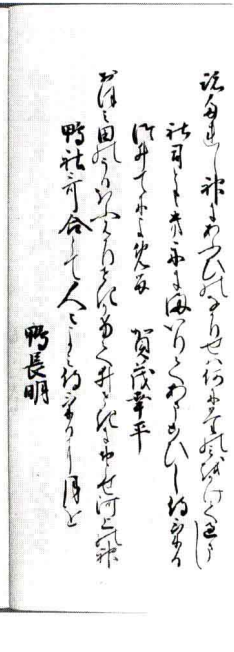
いかが要なき楽しみを述べ……

――随筆についての一随想――

山崎正和

『方丈記』と『徒然草』は、執筆年代のうへでほぼ百年の距離があるやうだが、見方によっては、後者は前者の書き終へたところから書き始めてゐる、といふ印象がないでもない。無常観といふ時代の流行思想とつきあふうへで、兼好は長明が辿りついた心境から出発してゐるやうに見えるからである。

『方丈記』は、有名な書き出しから終末近くまで、一見、高飛車な無常思想の宣伝の書として読める。自伝的な記録も世相観察の報告も、すべてきはめて整然と、この世が無常であることの論証として書かれてゐる。主張の一



『新古今和歌集』巻十九に入集した長明の歌「石川や瀬見の小川の清ければ月も流れをたづねてぞすむ」（宮内庁書陵部蔵）

前ページ
稗田一穂画「朧春」（昭和五十一年制作、山種美術館蔵）。水の流れ、月、桜を配し、『方丈記』の冒頭「ゆく河の流れは絶えずして、しかも、もとの水にあらず……」の世界を象徴するようである。また歌人でもあった鴨長明の「石川や瀬見の小川の清ければ月も流れをたづねてぞすむ」（『新古今和歌集』巻十九・神祇）を連想させる

徹さにやや鼻白む思ひもするのだが、救はれるのは、巻末に及んでこの調子が劇的に一転するところである。

「仏の教へ給ふおもむきは、事にふれて執心なかれとなり。今、草菴を愛するもとがとす。閑寂に著するもさはりなるべし。いかが要なき楽しみを述べて、あたら時を過ぐさむ」。

ここで、長明はみづからの思想的な立場を相対化してゐる。その立場の具体化として営んで来た、自分自身の反俗生活をも相対化してゐる。反省の言葉づかひそのものは苦しげだが、世界と自己にたいする彼の態度は、にはかにゆとりのあるものに一変した。そして、まさにこのゆとりのなかから出発するのが兼好であって、いはば彼は無常の世を軽やかに楽しんで生きてゐる。「日暮らし硯にむかひて心にうつりゆくよしなし事」も、彼にはそれが「よしなし事」であればこそ、かへって観察し記録するに価ひする対象なのである。

この二冊の書は、日本の随筆文学の代表的古典とされてゐるが、随筆文学の本質はじつはこの相対化のゆとりだ、といへるかもしれない。ゆとりといへば常識的だが、逆にいへば、随筆はまづ相対化するべき固い核を持たねばならず、そのうへでそれと軽くつきあってこそ文学に

下鴨神社。鴨長明は下鴨社正禰宜（しょうねぎ）惣官・長継の子として生れ、みずからも神官として生きるはずであった

なりうる、といふことかもしれない。

固い核といふのは、もちろん思想や世界観だけにはかぎらない。長明も兼好も本来は歌人であって、その精神の中心には伝統的な和歌の様式があった。三十一文字といふ形式から、比喩や修辞にいたる厳密な枠組が課されてゐて、それが二人の現実観察の正統の方法となってゐた。随筆といふ、文字通り自由な散文による表現形式は、それ自体、この固い様式的な核を相対化するかたちで生まれたのである。そればかりではなく、この時代の和歌は平安朝の伝統に直結してをり、それと関連して、「王朝」の美意識そのものが二人を支配してゐた。長明も兼好も、一方でこの優雅な趣味をたっぷりと呼吸しながら、しかしそれとつかず離れず、他方で同時代の写実的な眼で現実を見つめてゐるのである。

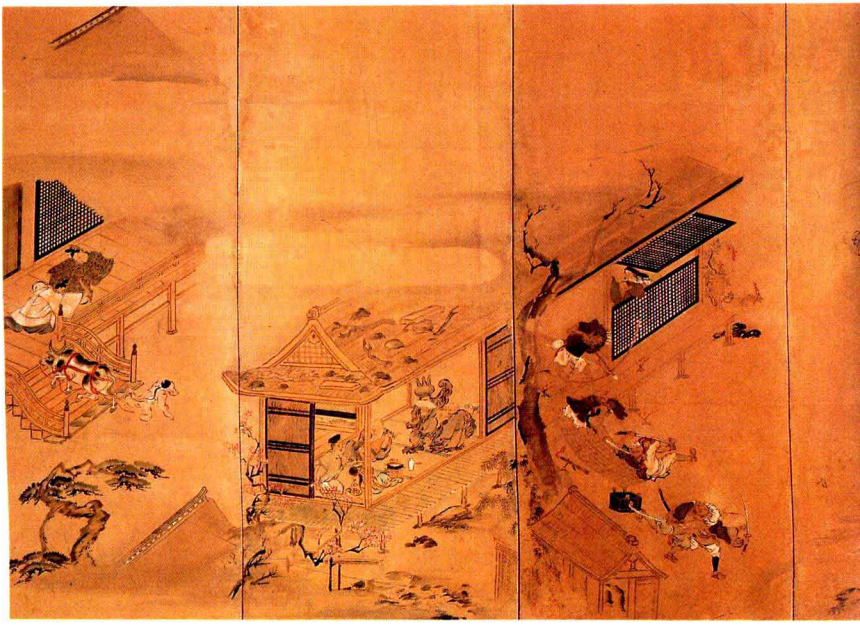
さらに、長明は職業的な神官であり、兼好は公家の家司を勤めたこともあって、それぞれに正規の職業を知ってゐる人間であった。和歌を別として、文章の執筆は生計の主要な手段ではなく、とくにこの二冊の本は、彼らにとって完全に余技の産物であった。職業の要求といふ現実の重い核を十分に知ったうへで、いはばそれを「よそながら」（徒然草）に見ながら、彼らは文章の世界に

鍬形恵斎画「徒然草屏風」（神奈川県立金沢文庫蔵）。『徒然草』から特定の章段を選んで一段ずつ、計十二段を描いた六曲一双屏風の一部。画面は連続した構図になっている。ここに画材となったのは、右より第一〇・二三六・八・六八・五三・二〇六の各段。江戸後期の作

遊んでゐたといへる。

さういへば、随筆はとくにイギリス文学が得意とする分野であるが、ふと思ふのは、イギリスがアマチュアリズムの国だといふことである。近代以後もっとも長く貴族を温存したこの国は、たぶんそのせゐで貴族的なゆとりを重んじる気風を残し、スポーツに典型的に見られるやうに、余技を尊ぶ精神を養ってきた。有名なシャーロック・ホームズは素人探偵であるが、これがロンドン警察の玄人の鼻をあかして喝采を浴びる国である。さまざまな思想家や文学者や政治家が本務とは別に、あへて余技風の文章に興じるのは当然だといっても、悪い冗談ではないかもしれない。

図に乗っていへば、そのイギリス人が随筆に求める趣味に、いはゆるユーモアとペーソスがあるが、そのうちでユーモアが深刻な事態を相対化する態度であるのは、いふまでもない。面白いのはペーソスの方であって、語源となったギリシャ語のパトースに比べて、はるかに柔らかい意味に変はってゐる。パトースが古代悲劇の感情であり、激情的な苦痛をさすのにたいして、英語のペーソスはいつしかそれを抑へて、繊細な哀感を表すやうになった。イギリス人は一方で、シェイクスピアのパトー



スの愛好者であるから、これはいささかふしぎな撞着に見えるが、じつはそれこそが随筆を生む精神の構造なのだ、といってみたい。腹の底で猛然たる激情をたぎらせながら、そのうへで淡いペーソスを語るのでなければ、随筆はふやけた駄文になるはずである。

周知のやうに、日本もまた日記や随筆の盛んな国であって、文学全体のなかに占める比重の高い国であるが、この点で、イギリスと日本には何か共通の背景があるのだらうか。すぐに思ひつくのは、どちらも大陸に近い島国であり、宗教や世界観や文学形式の点で、恐るべき生産力を持った世界の周辺にゐた、といふ事実だらう。つねに求心的な力で世界を統一したがる精神を横目に見て、それとつきあひながらも、より多く人生の細部に興味を持つ気風が共通してゐたといへば、乱暴な牽強付会になるだらうか。

それにしても、二つの古典的随筆の傑作を読むにつけ、いつも思ふのは随筆といふ形式の難しさである。定義上、随筆はいっさいの形式上の約束事を排し、主張や思想の体系性をも捨て、物語といふ枠組にも頼らないといふのだから、これは海図のない航海をするやうな難しさである。それでゐて、随筆も文学であるからには何らかの統

一が必要であり、少なくとも全篇を貫く気分的な同質性が求められる。それが文体であるとか、筆者の人格であるとかいふのは簡単だが、約束事のない文体とか、物語のない人格などといふのは、抽象的で何のことやらわからない。

そこで、たいていの随筆家が無意識に身につけ、言はず語らず用ゐてゐるのが、生活演技といふ方法である。『方丈記』の筆者がもっとも露骨な例であるが、文章を書くまへにまづ形式のある生活を構想し、それを身をもって生きるか、あるいは生きるふりをしてみせるといふ方法である。一日の日課を脚本として書き、調度や日用品を芝居の道具として整へ、長明はうっとりと自己催眠をかけて、満誓や源経信や蟬丸や猿丸大夫の役を演じてゐる。兼好の場合も、それが演じてゐる具体的な役名こそ明らかではないが、彼の基本的な性格と行動様式は歴然としてゐる。「つれづれなるままに」、「心にうつりゆくよしなし事」を眺め、「あやしうこそもの狂ほし」くしてゐる人物がそれであって、この冒頭のいささか概念的な総括は、一篇の芝居の卜書として読んでこそ自然なのである。

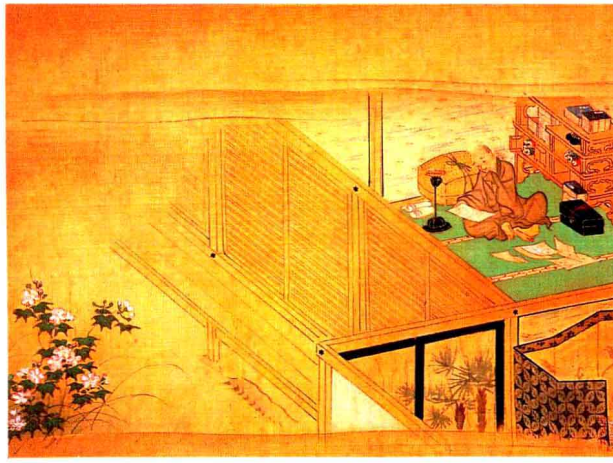
この二人にとって、演じられてゐる世界は半ば「王

尾形乾山画「兼好法師閑居図」（梅沢記念館蔵）。有髪の珍しい、草庵での兼好。乾山自身、若いころ双が岡に隠棲したことがある。歌は「すめばまたうき世なりけりかねてよりおもひしままの山里もがな」（『兼好家集』）

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

朝」の文人生活であって、それが失はれたものであるだけに、筆者の演技意識ははっきりしてゐる。虚構を虚構として生きる覚悟が明確に読みとれ、それがこの二人の作品に、たとへば『枕草子』のやうな幸福な作品以上の緊張をあたへてゐる、と見ることもできる。ある意味で、随筆は風俗の混乱期にこそ書かれるべきものであり、失はれた趣味を一人の筆者が必死に演じてゐるときに、傑作を生むものなのかもしれない。

しかし、その反面、随筆はそれだけに危険な形式であって、とかく生活演技の自己満足が鼻につくことになりやすい。方法としての生活様式の安定が、やがて筆者の精神そのものを鋳型にはめ、ゆとりはただの怠惰になって、相対化するべきあの固い核を忘れてしまふ。長明の「いかが要なき楽しみを述べて、あたら時を過ぐさむ」といふ言葉は、その意味では随筆形式そのものへの自戒であり、この自戒があってこそ随筆は文学の緊張を保ちうる、といへさうに思はれる。



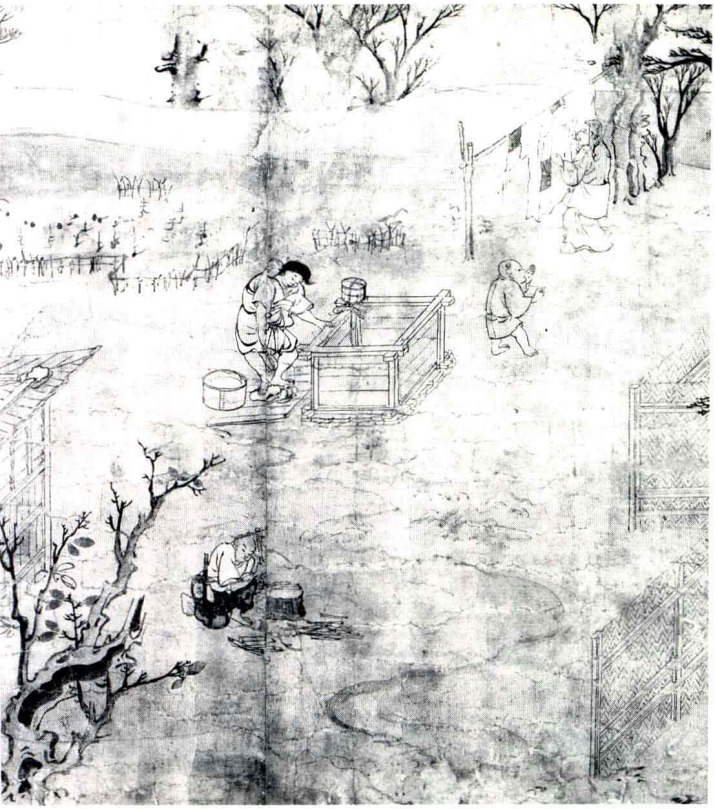
住吉具慶画「徒然草画帖」第29段（東京国立博物館蔵）。人の寝静まるころ、ひとり静かに、過ぎし日をなつかしく思い起こす。故人が使いなれた道具なども、昔と変わらず残っているのが、かえって人間の無常さを感じさせる

←伝土佐広周画「長明法師画像」（神宮文庫蔵）　右上の歌は『新古今和歌集』に入集した長明の和歌「秋風のいたりいたらぬ袖はあらじたゞわれからの露の夕暮」（巻四・秋上）。室町時代制作

『方丈記』の世界

稲田利徳

はじめに



身をすつる人はまことにすつるかはすてぬ人こそすつるなりけれ

これは保延六年（一一四〇）、二十三歳の若さで決然と出家遁世を遂げた西行法師の、勅撰集（『詞花集』）に入集した最初の歌である。「捨つ」という語を四度も畳みかけながら、世を捨てて出家した人よりも、むしろ出家しない人の方が、受け難い人身を疎略にし、身を徒らに捨てている愚かしさを、諧謔的な調子で告発している。ここには塵埃にまみれた俗世を離脱し、遁世・仏道修行という行為を積極的に選びとった意義を、自身にも力強く確認させようとする、作者の口吻さえ窺える。

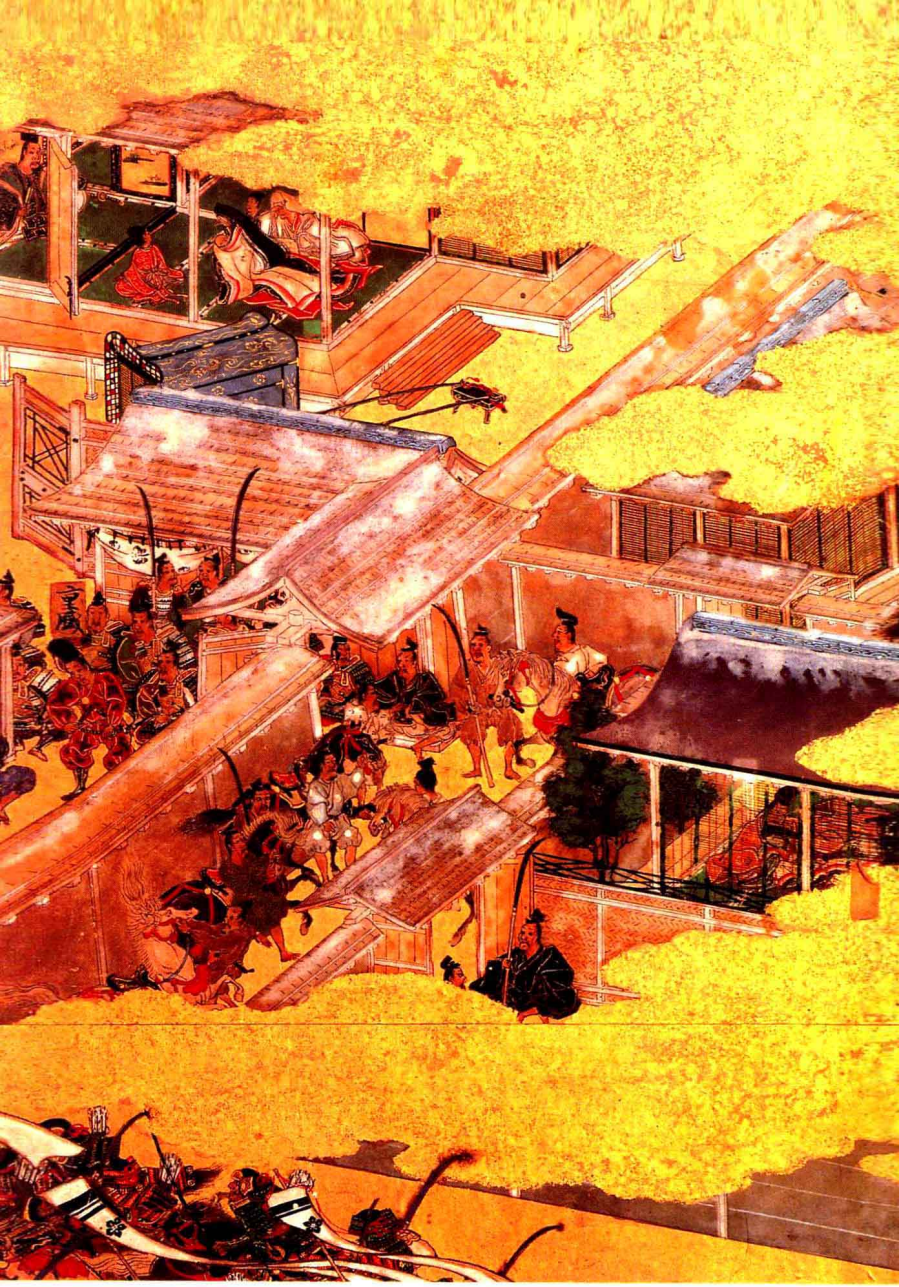
この西行の行動と思想に象徴されるように、古代末期から中世にかけて、多数の貴族や武士達が出家遁世という生活形態を志向した。

人々をして、このような行動に駆り立てた社会的な要因には、荘園制度に支えられてきた平安時代の貴族社会が、因襲的な管理体制のなかでしだいに腐敗、息苦しいまでの閉塞

「西行物語絵巻」（徳川美術館蔵）。出家後、嵯峨の草庵にある西行を描く。左上は、その部分拡大

情況にあったこと、その間隙をついて、武士階級が政権を掌握したため、権力争奪をめぐって戦乱が頻繁に勃発、さらに激しい天変地異まで累加、人々に名状しがたい不安な感情を抱かせたことなどがあげられよう。しかも、こういう社会情勢を反映するかのように、仏教界では末法思想がまことしやかに吹聴され、心ある人々の遁世志向に拍車をかけていった。

こうした遁世者には種々なタイプがあり、一概には言えないが、なかには決して退嬰的にならず、自己と社会を凝視し、積極的に独自な生き方を思索、実践した者も少なくない。長明や兼好も俗世を脱出し、主体的な固有な生きざまを思索した隠遁者であり、その精神の軌跡を綴った作品が、ここで対象にする、『方丈記』と『徒然草』である。



The Metropolitan Museum of Art,
Regers Fund, 1957

「保元・平治合戦図屏風」右双（ニューヨーク・メトロポリタン美術館蔵）。「六波羅合戦」を画材とし、源氏の攻勢にあわてる平清盛や、平重盛の反撃を活写する。「武士の時代」を象徴する傑作。桃山時代制作

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.